

經つくるゑ

樋口一葉

哀れ手向けの花一枝に千年のちぎり萬年の情をつくして、誰れに操のひとり住、あたらし美形を月花にそむけて、世は何時ぞとも知らず顔に、繰るや珠數の緒の引かれては御佛輪廻にまよひぬべし、ありしは何時の七夕の夜、何と盟ひて比翼の鳥の片羽をうらみ、無常の風を連理の枝に憤りつ、此處閑窓のうち机上の香爐に絶えぬ烟りの主はと問へば、答へはぼろり、襦袢の袖に露を置きて、言はぬ素性の聞きたきは無理か、かくすに顯はるゝが世の常ぞかし。

さむれば夢のあともなければど、悟らぬ先の誰れも誰も思ひを寄せしは名か其人か、醫科大學の評判男に松島忠雄と呼ばれて其頃二十七か八か、名を聞けば束髮の薔薇の花のやがて笑みを作り、首卷のはんげち俄かに影を消して、途上の默禮とも千歳の名譽とうれしがられ、娘もつ親幾人に仇敵の思ひをさせて我が智がねにと夫れも道理なり、故郷は静岡の流石に士族出だけ人品高尚にて男振申分なく、才あり學あり天晴れの人物、今こそ内科の助手といへども行末の望みは十指のさす處なるを、これほどの人他人に取られて成るまじとの意氣ごみにて、智さま拂底の世の中なればにや華族の姫君、高等官の令嬢、大商人の持參金つきなど彼れよ是れよと申込みの口々より、小町が色を衒らふ島田鬚の寫眞鏡、式部が才に誇る英文和譯、つんで机上にうづたかかれども此男なんの望み有りてか有らずか、仲人が百さへづり聞ながしにして夫れなりけりとは不審しからずや、うたがひは懸かる柳闇花明の里の夕べ、うかるゝ先きの有りやと見れど品行方正の受合手多ければ事はいよいよ闇黒になりぬ、さりながら怪しきは退院がけに何時も立寄る其れの家、雨はふれど雪は降れど其處に轆棒おろさぬ事なしと口さがなき車夫の誰れに申せしやら、其れから其へと傳はりて想像のか

たまりは影となり形となり種々の噂となり、人知れず氣をもみ給ふ御方もありし、其中に別けて苦勞性のあるお人しのびやかに跡をやつけ給ひし、探ぐりに探ぐれば扱も燈臺のもとの暗らさよ、本郷の森川町とかや神社のうしろ新坂通りに幾構への生垣ゆひ廻せし中、押せば開らく片折戸に香月そのと女名まへの表札かけて折々もるゝ琴のしのび音、軒端の梅に鶯はづかしき美音をば春の月夜のおぼろげに聞くばかり、ちらり姿は夏の簾ごし憎くや誰れゆゑ惜しみてか薬師さまの御縁日にそゞろあるきするでもなく、人まち顔の立姿かどに拜みし事もなければ美人と言ふ名この近傍にかくれなしと聞くは、扱こそ彌々學士の外妾か、よしや令嬢ぶればとてお里はいづれ知れたもの、其様なものに鼻毛よまれて果は跡あしの砂の御用心さりとはお笑止やなどゝ憎くまれ口いひちらせど眞の處は妬し妬しの積り、かゝる人々の瞋恚のほむらが火柱などゝ立昇つて罪もない世をおどろかすなるべし。

二

黒ぬりの塀の表かまへとお勝手むぎの經濟とは別ものぞかし、左門といひし舊幕臣彼の學士の父親とは社杯の肩をならべし間なるが、維新の變に彼れは静岡のお供、これは東臺の五月雨になり、血汐の赤き心を首尾よく顯はして露とや消えし、水さかづきして別れし限りの妻へ形見が此美人なり、人の不幸は生れながらにし後家さまの親を持ちて、すがる乳房の甘へながらも父といふ味夢にも知らず、物ごゝろ知るにつけて親といへば二人ある他人のさまの羨やましさに、いとしき事とひかけては幾度母の袖しぼらせしが、その母にも又十四といふとし果敢なく別れて今は身一つのいた

はしき、かの學士どの其病床に不圖まねかれて盡力したるが原因となり、くり返す昔しのゆかりも捨てがたく、引つゞいて行通しけるが、見るにも聞くにも可愛相なり氣のどくなり、これが若しもお俠んの飛びかへりなどならば知らぬ事、世といはゞ門の戸の外も見ず、母さまとならではお湯にも行かじ、觀音さまのお参りもいやよ、芝居も花見も母さま御一處ならではと此一トもとのかげに隠かれて、姿こそ嶋田の大人づくらせたれど正の處は人形だいて遊びたきほどの嬰兒さまが俄かに落し木の下の猿同やう、涙のほかに何の考へもなくお民と呼ぶ老婢の袖にすがつて、私しも一處に棺に入れよとて聞きわけもなく亡き入りし姿のあくまであどけなきが不惑にて、素より誰れたのまねば野心もなければ夫れより以來の百事萬端、身に引うけて世話すること眞の兄弟も出來ぬ業なり、これを色眼鏡の世の人にはほろ酔の膝まくらに耳の垢でも取らせる處が見ゆるやら、ざりとは學士さま冤罪の訴へどころもなし。

今の世の女子教育を賛成と言ひがたき心よりお園も學校がよひ爲せたくなく、廻り路でもなき歸宅がけの一時を此家に寄りては讀書算術、思ふやうに教へてみれば記憶もよく分りも早く、學士はいよく可愛がりしが、お園すこしの感じもなく、有がたし嬉しなどの口の先に出すどころか顔を見るさへ嫌やがりて、日の日の稽古にも書物の事より外に問ふことの無きは勿論、返事をさへ打とけて言ひし事はなく、強て問へば泣き出しさうな景色を見るお民きの毒さかぎりなく、何歳までも嬰兒さまで致しかたが御座りませぬ、流石に氣のおけるお他人には少し大人らしくお成り遊ばせどお心安だての我まゝか、甘へ氣味であの通りの御遠慮のなき、ちと御呵り遊ばして下さりませと極り文句に花を持たすれど學士は更に氣にも止めず、その幼なきが尊きなり、反對に跳かへられなばお民どのにも療治が六ツかしからん、園さま我れには遠慮は入らず、嫌やな時は嫌といふが

よし、我れを他人の男と思はず、母様と同やう甘へ給へと優しく慰きめて日毎に通へば、なほさら五月蠅く厭はしく車のおとの門に止るを何よりも氣にして、それお出と聞がいなや、勝手もとの箒に手拭をかぶらせぬ。

三

お民は此家に十年あまり奉公して主人といへど今は我が子に替らず、何とぞ此人を立派に仕あげて我れも世間に誇りたき願ひより、やきもきと氣を揉むほど何心なきお園の體のもどかしく、どうした物と考へ、困つたものと歎き、はては意見に小言を交せて或る日さまごま言ひ聞かせぬ。

何時かは言はふと存じたれど、お前さまといふ御人には呆れまする、是れが五つや十の子供ではなし、十六といへばお子様もつ人もありますぞや、まあ考へて御覽なされお母様がお病没から此かた、足かけ三年の長い間に松島さまが何れほど盡して下されたと思しめす、私しでさへ涙がこぼれるほど嬉しきにお前さまは木か石か、さりとは不人情と申ものなり、お覚えがある筈なれど、一々申さねばお分りになるまじ、お身寄り便りのなきお前さまの身を案じて、人は教へが肝腎のものなるに言はゞお園さまなどは今が白絲、何の色にも染まりやすければ、學校かよひに宜からぬ友でも出来てならず、一切我れに任かせてまあ見て居てくれと親切に仰しやつてお師匠さまから毎日のお出稽古、月謝を出して附け届けして御馳走して車を出して、あがめ奉る先生でも雪や雨には勿論の事、三度に一度はお断りが常のものなり、それを何ぞや駄々っ子様の御機嫌とりく、此一冊よみ終らば御褒美には何を參らせん、手ならひが能く出来たれば此次には文を書きて見せ給へと勿體

ない奉書の繪半切れを手遊おもちゃに下された事忘れはなさるまい、斯う申さばお前さまのお心には何の彼あんな物たゝきつけて返したしと思しめすか知らねど、紙一枚にも眞實まことのこもるお志こころざしを頂く物ぞかし、其御恩を何とも思はず、一年といふ三百六十五日打通して、好い顔どころか普通の暑い寒いも満足には仰しやらず、必竟ひつじやうあの方なればこそお腹もたてず氣にも懸けず可愛がつて下さるものゝ、第一天道てんたうさまの罰が當らずには居りませぬ、昨日のこの近傍あたりの噂を聞けば松島さまは世間で評判の方奥さま持たうならば撰り取りみどりに山ほどなれど何方どれもお斷りことたで此方へのお出は嬢様の上にはばかり日の照りが違うか、何といふお幸福と焼もちやいて羨みますぞや、そのお人に捨てられたらお前さままあ何と遊ばず、お泣きなさはお腹がたつか、お怒りになつてもよし、民は申だけは申ます、悪るくお聞き遊ばせば夫れまで、さりとは方圖はうづのなきお我まゝと思ひ切つて呵りつけしが是れも主思ひの一部なり、もとよりお園に悪る氣のあるではなく唯ただおさな子の人ぎらひして、抱かれるを嫌がり、あやされゝば泣くと同じく、何故か其人に氣が合はず去りとして格別あだに仇をして困らせんなどゝ念の入りし憎くさでもなく、まこと世間見ずの我まゝから起りし處しよゐ爲なれば、言はれるにつけて何と言譯の理由もなく、口惜しきか悲しきか恥かしきか無茶苦茶に泣いて顔もあげぬを、お民なほも何言かいほんとする折門かどにとまる例の車の音、それお出いでなり今日こそはお優やさしく遊ばせよ。

四

園さまはどうなされた今日はまだ顔が見えぬと問はれてまさかに、今までこれ〴〵で次の間に泣いて居られますとも言ひがたければ、少々御不加減ごふかげんで、然しもう宜しう御座りませうほどに、まあ

お茶を一つなどゝ民は其場をつくろひぬ。

學士眉を皺めて夫れは困つたもの、全體が健康といふ質でなければ時候の替り目などは殊さら注意せねば悪るし、お民どの不養生をさせ給ふな、さてと我れも急に白羽の矢が立ちて遠方へ左遷と事が極まり今日は御風聽ながらの御告別なりと譯もなくいへばお民あきれて、御申談をおつしやりますな、いや申談ではなし札幌の病院長に任じられて都合次第明日にも出立せねばならず、尤も突然といふではなく斯うとは大抵して居りしが、何か驚かせるが苦しさに結局いはねばならぬ事を今日まで黙つて居りしなり、三年か五年で歸るつもりなれども其ほどは如何か分らねばまづ當分お別れの覺悟、それにつけても案じられるは園様のこと、何の餘計の世話ながら何故か最初から可愛くて眞實の處一日見ぬも氣になる位なれど、さりとて何時來ても喜ばれるでもなく、結局あれほど厭やがるものを氣の毒なと氣のつかぬでもなれど、如何かして天晴れの淑女に育て、見たく、自惚れの言ひ分と笑ひ給はんが兎に角今日まで嫌やがられに來しなり、まづ學問といふた處が女は大底あんなもの、理化學政法などと延びられては、お嫁さまの口にいよく遠ざかるべし、第一皮相の學問は枯木に造り花したも同じにて眞心の人は悦ばぬもの、よしや深山がくれでも天眞の花は都人を床しがらする道理なれば、此うへは優美の性をやしなつて徳をみがく様に教へ給へ、我れは此地に居たりとて根からさつぱり談合の膝にも成るまじきが、これからはいよくお民どの大役なり、前門の虎、後門の狼、右にも左にも怕らしき奴の多き世の中、あたり美玉に疵つけ給ふは、園さまにも言ひきかせたきこと多くあれど我が口よりいはゞ又耳に兩手なるべし、不思議に縁のない人に縁があるか馬鹿らしきほど置いてゆくが嫌やな氣持と、笑つてのけながら調子がいつもほど冴えては聞えず。

散々のお民が異見に少し我が非を知り初し揚句、その人は俄かに別れといふ、幼なき心には我が失禮の我まゝを憎みて夫故に遠國へでも行かれるやうに悲しく、侘がしたけれど障子一重を出る時機がなく、お民が最初に呼んで呉れし時すこしひねく、れてより拍子ぬけがして今更には馳け出しもされず、其うちにお歸りにならば何とせん、もう逢つては下さらぬかなど、敷居の際にすり寄つてお園の泣けるも知らず、學士はその時つと起つて、今日はお名残なるに切めては笑ひ顔でも見せて給はれとさりと障子を明くれば、おゝ此處にか。

五

左様ないてくれば困る、お民どのも同じやうに何の事ぞ、もう逢はれぬと言ふでもなきに心細き事言ひ給ふな、園さま何も詫びらるゝ事はなし、お前さまの事は宜しくお民が承知して居れば少しも心配の事はあらず、唯これまでと違ひて段々と大人になり世間の交際も知らねばならず、第一に六つかしきは人の機嫌なり、さりとて諂ひの草履とりもあまりほめた話してはなけれど开處が工合ものにて、清淨なり無垢なり潔白なりのお前様などが、右をむくとも左を向くとも憎くむ人は無き筈なれど夫れでは世が渡られず、我れも矢張り其中間の一枚板にて使ひ道が不向きなれども流石に年の功といふものか少しはお前さまより人が悪るし、さりとて悪るく成り過ぎては困れど、過不及の取かぢは心一つよく考へて應用なされ、實の處出立は明後日、支度も大方出来たれば最早お目にかゝるまじく随分身躰をいとひて煩ひ給ふな、此上にお頼みは萬々見送りなどして下さるな、さらでだに泣き男の我れ朋友の手前もあるに、何かをかく察られてもお互に詰らず、さりな

からお寫眞あらば一枚形見に頂きたし此次出京する頃には最はや立派の奥様かも知れず、それでも又逢つて給はるか顔のをのぞけ、膝に泣き伏して正體もなし、夫れほど別れるがお嫌やかと背を撫ぜられて黙頭づく可愛さ、三年目の今日今さらに寧いつもの愁らさが増しなり。

柔らかき人ほど氣はつよく學士人々の涙の雨に路どめもされず、今宵は切めてと取らへる袂を優しく振切つて我家へ歸れば、お民手の物を取られしほど力を落して、よしや千里が萬里はなれるとも眞實の親子兄弟ならば何時歸つて何うといふ樂しみもあれど、ほんの親切といふ一筋の糸にかゝつて居し身なれば、遠ざかるが最期もう縁の切れしも同じこと取りつく島の頼みもなしと、我れ振りすてられしやうな歎きにお園いよいよ心細く、母親の別れに悲しき事を知り盡して腸もみ切るほどに泣きに泣きしが今日の思ひは夫れとも變りて、親切勿體なし、殘念など、いふ感念が右往左往に胸の中を掻き廻して何が何やら夢の心地、さりとて其夜は寐らるゝところならず、強ひて床へは入りしものの寐間着も着かへず横にもならず、さてつくぐと考へれば目の前に晝間の様々が浮かびて、我れは知らねど胸に刻まれし學士が言ひし詞一言半句も忘れず、歸り際は此袖をかく捉らへて待つとし聞かば今かへり來んと笑ひながらに仰せられし彼のお聲ももう聞くことは出來ず、明日からは車のおとも止まるまじ、思へば何故に彼の人のあの様に嫌やなりしかと長き袂を打かへし打かへし見る途端、紅絹の八ツ口ころくと洩れて燈下に耀やく黄金の指輪、學士が左の薬指に先のほどまで光りしものなり。

六

苔みと思ひし梢の花も春雨一夜だしぬけにこれはこれと驚かるゝ物なり、時機といふものゝ可笑しさにはお園の少なき胸に何を感じしか、學士が出立後の一日二日より爲る處業どことなく大人びて今までの様に我まゝも言はず、縫はり仕事よみ書の外、以前に増して身をつゝしみ誘ふ人ありとも人寄せ芝居の浮きし事に足も向けねば、折ふしは遂ひに今まで見し事もなき日本全圖などゝいふ物をお民がお使ひの留守の間に繰り開けて居る事もあり、新聞紙の上にも札幌とか北海道とか言ふ文字には逸はやく目のつく様子、或日お民氣がついて見れば右の指にありくと耀やくものあり。さても秋風の桐の葉は人の身か、知らねばこそあれ雪佛の堂塔いかめしく造らんとか立派にせんとか、あはれ草臥れもうけに成るが多し、文化とか開明とかの餘光に何事も根から葉から掘かへして百年千年むかしの人の心の中まで解剖する世に、これを職掌の醫道の妙にも我が天授の齡ひは何うにもならず、學士札幌へ赴きし歳の秋、診察せし空扶斯患者に感染して、惜しや三十路にたらぬ若ざかりを北海道の土に成しぬ、風の便りにこれを聞きしお園の心。

空蟬の世の中すてゝ思へば墨染に袖の色かへるまでもなく、花もなし、紅葉もなし、丈にあまる黒髪きり拂へばとて夫れは見る目の菩提心、人前づくりの後家さまが處爲ぞかし、うき世の飾りの紅をしろいこそ入らぬ物と洗ひ髪(おしろい)の投げ島田(おしろい)に元結一筋きつて放せし姿、色このむ者の目には又一段の美とたゝえて聳にゆかん嫁にとらん、家名相續は何ともすべしと言ひ寄る人二人二人ならず、あの時學士が親友なりし某、當時醫學部に有名の教授どの人をもつて法の如く言ひ込みしを、お民上もなき縁と喜びてお前さまも今が花のさかり散りがたに成つて呼んで歩行くとも賣れることでも

なし、大抵にお心を定め給へ、松島さまに恩はありとも何のお約束がありしてもなく、よし有りたりとも再縁する人さへ世には多し、何處へ憚かりのある事ならねばとて説諭せしに、お園にこやか
に笑ひて口先の約束は解くにもとかれもせん、眞の愛なき契りは捨て、再縁する人も有べし、素よ
り彼の人に約束の覚えなく増して操の立てやうもなけれど、何處とも知らず染みたる思ひは此身あ
る限り忘れ難ければ、萬一かの教授さま達て妻にと仰せのあらば、形だけは参りもせん心は容易く
たてまつり難しと傳へ給へと、事もなく言ひて聞き入れる氣色のなきに、お民いひ甲斐なしと斷念
して夫れより又進めずとぞ、經机の由縁かくの如し。

或る口の悪るきお人これを聞きて、扱もひねくれし女かな、今もし學士が世にありて札幌にもゆ
かず以前の通り生やさしく出入りをなさば、蟲づのはしるほど嫌やがる事うたがひなしと苦笑ひし
て仰せられしが『ある時はありのすさびに憎くかりき、無くてぞ人は戀しかりける』とも角にも
意地わるの世や意地悪るの世や。